

発行所〓社会通信社 発行人〓滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二一九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替〓〇〇一〇〇―九―五八四三一 労金〓中央労金本店No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

基本的矛盾の発現

滝野 忠：2

情勢について(四)

都議選結果を総括する

伊勢 太郎：3

遠方の友からの便りと返信

原野人：5

―エンゲルスとマルクスに沿って―

現 状 を 憂 う

山下 俊幸：8

―結党時の高揚感が忘れられない

武委員長の実刑判決を阻止！

稲村 守：10

―滋賀のタイヨウ生コン事件(1千万円恐喝)勝訴をバネに―

ヒロシマ・ナガサキ 原爆「写真・絵」展 佐野 周二：12

―チエルノブイリ原発事故から35年！フクシマ原発事故から10年―

◇信州松本通信◇

松本市音楽文化ホール運営に携わって 中澤 秀行：12

―経済学はロビンソン物語を愛好する(一)―

読者からのおたより …………… 16

旬刊社会通信

NO.1342

二〇二一年八月一五号

二〇二一年八月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

基本的矛盾の発現
情勢について（四）

資本主義の発展は矛盾の発展、拡大です。生産力の発展が、私有財産制という生産関係と衝突するからです。マルクス主義の根本原理です。これを忘れたり、放り出したりしてしまえば、歴史を正しく、正確に解釈し、実践することはできません。マルクスの歴史理論（唯物史観）は、それ以前の、そして今も延々とつづく歴史理論の2つの欠陥を明らかにしました。第一は歴史的人物の活動の観念論的な動機を考えるだけで、物質的生産の発展が考えられなかったことです。二つは住民大衆の活動を考えなければならぬことを明らかにしたことです。

資本主義は永遠でしょうか。矛盾にあふれ酸欠の金魚の状態にあるのではありませんか。6月11日、自民党の国会議員150人が「新たな資本主義を創る議員連盟」をつくりました。大將は菅と総裁の席を争った岸田文雄前政調会長、最高顧問に安倍と麻生を担ぎ、「自民党から新しい資本主義のモデルを発信したい」と、みずからを「修正資本主義者」であるかに描こうとあがいています。修正だろうが、真正だろうが資本主義の維持が本質です。自民党政治・権力の中核にある輩たちが資本主義の現状に自信をもちえなくなっていることのあらわれです。

資本主義の根本矛盾は生産手段の私有制と生産の社会的分業から発生する生産力と生産関係の矛盾です。ここから生まれる現代資本主義の諸矛盾はどこに、どのようにあらわれているでしょうか。

第一に恐慌です。感染症コロナは、交通・運輸をとめ、再生産過程を遮断しました。生産力は発揮できません。20年度のGDPはマイナス4・6%とリーマン恐慌時を超えました。これは「ショック」でしょうか、「恐慌」でしょうか。

第二に慢性的過剰生産ということです。21世紀、「デフレ」がいわれ、「持続的」かつ「自律的成長」が喧伝されました。この実体はなんでしょうか。需要が供給に追いつかぬことを示します。慢性的な需要と供給の不均衡、経済の停滞と後退、物価の下落は「恐慌状態」にあつたということです。

第三に人口減少です。資本の最大の生産力は労働者です。労働者なしに資本はなりません。人口減少という現象は、資本主義という歴史的生産関係がもはやなりたちえないことを示しはじめているということです。この背景に私有財産制度の発展とともに成長した現代の家族制度である単婚家族、一夫一婦制は大きな変化の時にあるということでもあります。

第四は都市と農村、過密と過疎のいつそうの深刻化です。

マルクスは『共産党宣言』で、①ブルジョア階級は農村を都市の支配に屈服させた、②巨大な都市をつくり出し、農村人口にくらべて都市の人口を増加させた、③資本主義は農村を都市に依存させた都市と農村の対立を予言しました。

労働者は都市に集積される、生産手段は都市に集まり、出稼ぎは大量の人口の流出を生み農村を都市の支配に屈服させました。過疎と過密、都市と農村の対立です。権

力者は農村を彼らの支持基盤を安定的に支配したい、支配を強めるため農村の「再生」を口にします。地方再生、地方創生です。この政策は夢、幻想です。資本主義社会にあつては「再生」「創生」できないことは、日々の生活が示しているとおりです。

(滝野 忠)

都議選結果を総括する

選挙と政党 都議定数は42選挙区、127議席。選挙協力・共闘が力を発揮する1人区7、二人区8、3人区は4である。共産と立民はこれら地域で候補者を調整、前回、都民を推した公明は自民支援へ反転した。

候補を立てた政党は保守の都民、自民、維新、国民と没落を必然化されている中間階級（小商工業者）を支持基盤とする公明の5つの党、マルクス主義を嫌いけちをつけ、これまでの社会科学の疑念をゆがめる議論が拡がっている。「保守」とは現社会体制の資本主義社会維持を目的とする政党、組織、個人である。

立憲民主は連合を支持基盤とし、「立憲主義」をスローガンとする。立憲主義とはブルジョア革命時代のスローガンだ。歴史的な役割を終えたブルジョア民主主義の改革、改良をめざす。民主主義の新しい段階であるかに考える。しかし、この考えは民主主義への幻想を大きくすることにすりよって、資本主義の維持・延命につながる。

共産党は「公式」には社会主義・共産主義を未来の社会像とする、共産主義政党である。綱領は現社会（資本主義社会）から未来社会（共産主義社会）への「飛躍」を否定する。階級闘争なしに共産主義社会が生まれくるかのように説く。だから、労働者階級の階級支配（プロレタリアート独裁）の概念は消去される。この思想は19世紀のベルンシュタイン流修正主義、20世紀の戦争時代のカウツキー主義の復活である。

この他、候補を立てたのは没落階級を基盤とし組織労働者を嫌う、というより敵対する維新、無政府主義の要素が強いいわ、女性が中心の市民政党ネットであった。

社会民主主義をいうが、党首の思想は市民主義の社会民主党は候補をたてられない。

評論 朝から晩までTVはアホな評論家輩が、口角泡を飛ばす。彼らの日常、生活は社会とは隔絶されたスタジオにある。彼らの「予言」は現象のられつと解説だから「当たる」ことはなく、「くり返し」である。くり返しは視聴者・有権者に士気沮喪となる。彼らはこう評論した。

1、焦点は都民がどれだけ敗けるか、自民がどれだけ勝つか。前回是小池旋風が自民を蹴飛ばした。しかも、公明は自民支援に回った。自民と都民の支持基盤は同じだから、自公で過半数は確実だ。

2、共産は組織が強い、しかし党勢は伸び悩んでいるようだ。機関紙はそれを報じる。地方議員選は健闘しているが、飛躍の傾向はうすい。立民は組織がない、弱い。立民諸議員の目は組織より世論、風にむかう。たまに勝つことがあっても、組織に支えられているわけではないから、すぐしぼむ、だから、共産はどれだけ減るか、立民は現職7でしかないのだからふえる。しかし、体制に影響ない。

3、共産と立民の注目点は候補者調整のゆくえだ。もし、共闘、候補者調整がうまくいくようなことがあれば、衆院選に影響する。

選挙結果 結果はこうである。(かっこ内は前回当選者数)。自民33(23)、都民31(49)、公明23(23)、共産19(18)、立憲15(0)、ネット1(1)、維新1(1)。

1、自民はふえなかった。自民の組織は弱くなった。ぼくは渋谷に住む。定数は2だ、そこに都民2(女性)、自民、共産、立民が名のりを上げた。都民、自民減らすと共産、立民が候補を立民で調整した。立民がいちばん、ついで都民の一人が当選となった。定数3の中野も同じ。立民がトップ、都民が2番め、3番めが公明、ここでも自民は落ちた。

共闘、候補者調整は有効なことを示した。自民を減らした。自民組織も弱くなっている。選挙期間中、自民候補の宣伝カーと対面しなかった。党の総裁、幹事長は街頭に出なかった。

2、自民と公明はあわせて56、過半数にほど遠い。他方、進歩の勢力は共産、立民、ネット、無所属あわせ36に伸びた。共産がよくがんばった。

3、評論家の予想は外れた。権力闘争が自民党内で激しくなる。安倍の7年自民の権力構造は変わっていない。衆院選までに予想しなかったことがおきる。さて、これからである。

共闘の原則 1、共闘は自民をやつつけるために必要だし、重要だ。共産の綱領はマルクス主義の原則からは間違っている。これを指針に戦術・スローガンをつくる。誤った戦略そして戦術は一貫しているから崩れることもない。矛盾が大きく修正をせまられるのは、情勢が大きく変化し、「革命的情勢」となる時である。

2、都民の限界ははっきりしている。小池党であることだ。永久に都知事であり続けることはできない。没落とともに党は分裂する。31の議員は自民、立民、その他へと「くもの子」になる。

3、立民は歴史的に反動となったブルジョア民主主義にしがみつく。憲法の理念の実現を夢想する。それには数だと、質を考えることはない。情勢が高揚期に入ると出世主義者が群がってくる。2009年前後がそうであった。規律と組織が嫌いな階級―学者、弁護士、タレント等―出身が多いからおさらだ。こんな相手と手を結び共闘するには、己を律する党派性が大事だということだ。共闘することで、己がよって立つ基本を曲げてはいけない。

世界観と組織 世論調査は「選挙に行くか」を問う。都議選直前の東京新聞では72・7%が必ず行く、18・1%が多分行くとこたえ、行かないは5・9%にすぎぬ。期日前投票がない時、天候が左右した。今は前ほどではない都議選の投票率は41・42%、前回より10%低い。コロナ、五輪、政治腐敗で内閣支持は下がる。しかし、自民党支持は下がらず投票率だけが下がり続ける。

形式的にしかものを考えない人びとは「政権が変わる、政治が変わるといふ雰囲気をつくるのが大事」、「10%が動けば政治は変わる」とのたまわく。それには「絶対

反対はダメ、政策を対置して競い合うこと」と。政策は大事である。権力政党に政策を対置して何がおきるか。権力政党は己の政策が不人気なら、野党の政策をパクればいいだけではないか。なぜ野党の支持率、投票率があがらないか。国民は毎日、権力者の思想宣伝にさらされている。野党の「くり返し」にいらつき、政策を対置するだけでは世の中は変わらないことを知っている。

(伊勢 太郎)

遠方の友からの便りと返信

— エンゲルスとマルクスに沿って —

遠方の友から、次のような質問を含む便りをいただいた。

米英日の革命は最後になるのでは、一国社会主義は？

「社会主義国になっても、必要に応じて受け取る生産力を実現するには長い期間を要します。まして階級をなくして国家を死滅させるのはいつの日になるか解りません。希望があれば10年20年は我慢できると思いますが、それ以上になると我慢できないのが人間のように思います。もう少し短い期間での戦略が必要ではないでしょうか？ 帝国主義的経済の恩恵にあずかる先進国労働者は、ブルジョアの意識を持つので、米英日の革命は世界の最後になるのではないのでしょうか？」

中国の現状は国家社会主義と形容してもおかしくないほど科学的社会主義とはかけ離れています。プロ独裁理論を悪用して、どこか社会主義政権も変質しているように思います。

私は思想的雑居状態の日本社会党では革命などできないと協会テーゼに依拠して思想統一を求めてきました。

思想統一できたはずの新社会党でもベイシックインカムをきっかけに旧社会党の小型版のようになり、まだ大きいだけ旧社会党のほうがよかったのかと思うことがあります。」

以上のような便りに、次のような返信を送った

エンゲルスとマルクスに学ぼう

エンゲルスの論稿で、あまり問題にされていない箇所があります。新潮社版マル・エン選集第12巻『反デューリング論II』で、157頁の最後のところです。

『史的唯物論について』—『空想から科学への社会主義の発展』イギリス版序文—ですが、岩波文庫の『空想より科学へ』の手にある旧版では、107頁です。

「しかし、ヨーロッパの労働者階級の勝利はイギリスのみにかかっているのではない。それは、すくなくとも、イギリス、フランス、ドイツの協力によってのみ確保されるものである。……」

労働者階級の勝利は、エンゲルスが述べているように、どこかの一国のみにかかっているのではなく、諸国の協力によるでしょうし、階級をなくし国家を死滅させるの

に、いかほどの期間を要するか等々も、同様にイギリスだけでも、ドイツだけでも、フランスだけでも決まるのではなく、これら諸国の協力関係によるでしょう。

先進諸国の生産力は、機械の稼働率を下げたり時には廃棄するほどに過剰です。後進諸国からの変革は先進諸国の協力を得てもなお長年を要するのも当然でしょう。

社会主義が高度に発展するのにも、国際的、国内的条件によって長短の年月を要することになるでしょうが、いかに長期になる場合でも、その間にすべての労働者や農民等の生活に目に見える改善と、明確な展望がありさえすれば、階級解消・国家死滅までにたとえ数十年や百年を要しようともかまわないのではないでしょう。

英独仏にくらべて米の革命は最後になるかもしれませんが、日英はそうとも言えないでしょう。これほど情報通信技術が発展し、交通運輸が迅速化し、資本が国際化し「多国籍化」している今日では、日本の労働者階級はアジア諸国だけでなくヨーロッパ諸国との協力も重要になるでしょう。いずれの国で労働者階級が勝利しようとも、資本家階級は国際的に協力し全力で社会主義国家を倒そうとするでしょう。

173年も前に「万国のプロレタリア団結せよ！」と宣言したマルクス、エンゲルスの言葉は、ますます重く響き渡っています。

だがまずは自分自身のブルジョア階級を

日本だけの一国社会主義はありえず、諸国との協力が不可欠ですが、マルクス、エンゲルスは『共産党宣言』（岩波文庫版、54頁）でこう述べています。

「ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の闘争は、内容上ではないが、形式上は、なによりも第一に国民的闘争である。おのおのの国のプロレタリア階級は、当然まず自分自身のブルジョア階級を片づけねばならない。」

中国を支配する独占的大資本家

中国などがすっかり変質してしまった根本原因はすでに明らかにしてきました。

「白い猫でも黒い猫でも、ネズミを捕まえてくれるのがよい猫だ」という「改革・開放政策」は変質に拍車をかけました。

クレデイ・スイス社の調査によると、資産5000万ドル（約54億円）超の超富裕層は2019年現在で中国が米国に次いで世界第2位の1万8130人。3位独、4位英、5位印、6位仏、7位カナダ、8位日本を大きく引き離しています。

企業の経営者や共産党の幹部や中央・地方の官僚幹部などが資本家になり、独占的大資本家になっています。対極には大勢の産業予備軍、失業者や半失業者、困窮農民が生まれています。

「国家社会主義」などというよりも、すでに米日英独仏と同様な国家独占資本主義に変質し、帝国主義を露わにしているのです。中国の一带一路政策や南沙諸島等の問題やウイグル族抑圧問題などもその現れです。

日本にはソ連や中国などと違い、成功裏に社会主義への移行・発展が可能になる十分な条件があることは、『21世紀宣言』にも明らかにされています。『社会通信』（2月15日号等）にも書いている通りです。

デューリング病とドイツ社会民主党

かつてのドイツ社会民主党の幹部たちが感染した「デューリング病」について、向坂逸郎は次のように書いています。

「当時のドイツの社会民主党に及ぼしたデューリングの影響は大変なものであったようである。当時のドイツの社会主義運動における理論の水準は、ずい分低かったらしい。マルクスの『共産党宣言』（1848年）はもちろん出ていた。『資本論』第一巻（1867年）も出ていた。しかし1875年のゴータ綱領に示されたような理論的混乱（マルクスの『ゴータ綱領批判』参照）が、この時代には。とにかく通用したのである。ドイツ社会民主党は、まだ、マルクスの右の重大な著書に述べられている理論を、極めて不十分にしか理解しなかった。（中略）

党ではまずベルンシュタインがデューリング病に感染した。ついで、フリッツェ、モスト、ベーベル、ブラツケ等の党の首脳部にある人が、デューリング病にかかった。リープクネヒト（ウイルヘルム）が、最も軽かった。」（『エンゲルスをめぐる』社会主義協会版226〜227頁）

ベイシックインカム病と新社会党

わが党の幹部諸君も似たような状況に陥っています。ベイシックインカムという言葉は引下げたものの、同じ内容の非科学的な理屈にこだわっています。

『資本論』はもとより、『共産党宣言』や『空想より科学へ』や『ゴータ綱領批判』を読もう（正確に理解しよう）としない諸君や、斎藤幸平准教授のプチブルジョア理論に飛びつくような新しがり屋の諸君が党をすっかり混乱させています。

北海道に見られるように、昨日まで和気あいあいと党活動に取り組んできた皆さんが、中央首脳部の奇妙で非科学的な理屈の押し付けによって、混乱と対立に追い込まれています。4年間もこだわってきた議案で首脳部のメンツをつぶすわけにはいかなないと、善意から多くの党員は大会の議案に賛成してはいます。それでもこんな空想的な理屈に賛成するわけにはいかないとする皆さんが全国に三分の一もおります。佐々木一雄さんが指摘するとおり、真理は多数決では決まりません。

災いを転じて福にしよう

新社会党はベイシックインカムとそれに類似する理屈によって混乱が持ち込まれましたが、それがいかに間違いであるかは、我々の論争を通じて、全国の少なからぬ党員がすでに認識しているところです。

「デューリング病」にくらべたら、わが首脳部の「ベイシックインカム病」とその類似病（変異株）は、はるかに単純で分かりやすく、少数者の病です。

このような病気を蔓延させることなく克服するためにも、わが党が飛躍的に成長するためにも、自治体議員を大きく増やすためにも、マルクスやエンゲルスの前記のような著作の学習会を、全国の地域と職場にも、首脳部にも組織することです。

関連する諸問題については『社会通信』2月15日号、5月15日号、7月15日号等に書いたつもりです。是非御一読御批判ください。

（原 野人）

現 状 を 憂 う

― 結党時の高揚感が忘れられない ―

新社会党は変質したのか

新社会党の現状を憂う。新社会党全国大会(2021年4月18〜19日)で4・5号議案が採決してまで決定することはないだろうと楽観的に見ていた。ベーシックインカム論が提起されて4年余り、党内の論争が続き全体の合意はえられていない。従って、対立よりも団結を優先する常識は持ち合わせているだろうと。

全国大会に向けて4・5号議案賛成者から叫ばれた「資本家にも人権がある、資本家も含め平等に」等々。社会主義云々以前の問題である。驚きというより何かの間違いでないか、勘違いであって欲しいと願っていた。

30%の反対がありながら何故、強引なまでに採決したのか。その答えが見えてきた。『社会通信』No.1337(2021年6月1日)のKさんの報告によると、岡崎委員長の挨拶の一部として「日本でも若手研究者たちが社会主義の新たな課題を提起しています」と紹介している。「若手研究者たち」とは斎藤幸平らのことだろうと容易に想像できる。

また、討論の中で山形の石川さんが「成熟した資本主義国では改良の積み重ねで連合政権をめざす」「マルクス・レーニンの崇高な議論を中二階から振りかざすのでなく、協同組合運動などすべきである」と発言したと。

『新社会』(2021年5月4日)によれば、加藤副委員長の答弁として「私たちの多くは労働運動の現場を離れており、地域で社会や生活に関わりをもつて運動を再建せざるを得ない」とある。

これだけで科学的社会主義の理論の軽視(放棄)が透けて見えてくる。

過労死・過労自殺、パワハラによる精神疾患・自殺。世界のトヨタでも社長自ら謝罪せざるをえない労働現場。最近、JR東海会社の労働者の話を聞く機会があった。労働実態、労務管理、見せしめの差別・脅し・嫌がらせは私の体験よりもひどい。大卒者の入社早々の退職も多いという。労資協調・御用組合の中では不平不満が渦巻いている。我々の力不足によって闘いを組織できていないが、こんな時代に「資本家も含めて平等」(階級協調)などと社会主義政党内で平気で口にするとは驚愕の極みである。

一方で、「綱領『21世紀宣言』の補強だ」「階級対立、階級闘争は否定しない」「社会主義をめざす」という。強調されれば、されるほど空しく聞こえる。綱領との整合性、理論的検討、運動論などを無視した言葉マジックを信じ込む風潮すらある。哀れでもある。素直に考えれば、「資本家も含めて平等」は階級対立、階級闘争の否定と捉えるのが常識である。

改良闘争

労働者がおかれている窮状はマスコミですら取り上げている。社会主義革命の担い手は労働者階級であり、搾取・収奪し支配する階級と搾取・収奪され支配される階級

との階級闘争をもって実現する。階級協調などありえない。どんなに困難でも労働運動の強化無くして社会主義は実現しない。困難な課題を先送りして別の方策を考えても根本に迫れない。

「多くの党員が労働運動の現場を離れている」のなら、党として労働運動強化と活動家の養成、社会主義者を育てる戦略・指針を早急に策定することである。第二に、改良闘争はどんどん進めなければならない。しかし、「改良闘争の積み重ねで連合政権をめざす・・・」は、かつての社会党内における論争で決着した問題で、新社会党を社会主義政党から改良主義政党への巻き戻しで、時計の針を急逆転させ、古い暦を見ているようだ。改良闘争で何を求めるのか、何が改良できるのか、階級闘争、抵抗闘争を軽視して、改良など出来る筈がない。労働者派遣法の成立と改悪を許し、指定管理者制度、会計年度任用制度など次々と抵抗抜きに非正規雇用労働者を生み出し、大量の貧困層を生み放置している現状を理解すべきである。

社会主義政党的立ち位置は労働者階級にある。B I、普遍主義(資本家も含めて平等に)、階級協調、労働運動軽視で労働者に支持されるのだろうか。新社会党の組織の拡大・発展につながるのだろうか。疑問は尽きない。私は落胆している。

資本家の階級性

私は労働争議の解決交渉において水面下で大企業経営者や日経連の幹部とも対応してきた。交渉事だから当然柔軟に対応するが、思想まで売り渡すことはない。労働争議は現実の問題なので解決に向けて妥協もある。労働争議で常に心してきたのは、「裁判は原則的に」「大衆行動は大胆に」「解決交渉は柔軟に」ということだった。原則(思想)を堅持するものこそ、大衆(仲間)の信頼が得られ、妥協もできる、というのが労働争議に対する私の信条。

相手も階級的に対応してくる。私が社会党員であることを承知して対応してくる。私の話す内容が当事者(労働者)に支持されているか、信頼されているかを尺度にしているように感じる。また、教えられることもある。

労働委員会について話した時、日経連(当時)の某幹部は冗談を交えて「山下さんは労働委員会は労働者の団結権を保障した権利救済機関である」と言われるが、「労働委員会は労働者の暴動を抑えるためであり、裁判所は革命を阻止するためにある」と言われたことがあった。

労働委員会は厚労省の管轄下にあり、事務局長は厚労省の局長級の高級官僚が担当する。思い起こしてみると、三池闘争では、三池労組のピケを排除するため裁判所は強制執行命令を出し、1万2000人の警察官を動員した。中央労働委員会は労資双方に白紙委任を求め、三井資本の主張を基本とする「幹旋案」を三池労組に押し付けた。当時、中労委事務局長は労働省官僚の松崎芳伸、彼は後に日経連専務理事に就任している。

法律も公然と無視し、違法行為を堂々とする。労働組合法を無視して不当労働行為によって第二組合を作る。国労でも全国の地労委で積み上げられた勝利命令を全く履行されず違法状態を続けた。右翼・暴力団さえも利用する。

関西生コンを見るが良い。労働運動で逮捕650日余の勾留、懲役10年の求刑は何を物語っているのか。労働運動として当たり前の行動が弾圧される。春闘も反合理化闘争もなくなり、当然「ストライキ」もない。闘う労働組合を潰すという資本の論理が貫かれている。関西生コンの例でも、警察、裁判所など国家権力が資本の意思で動いていることが解る。出た杭は狙い撃ちで潰しにかかる。杭を沢山作ることに対抗する以外にない。

望むこと

今でも25年前の結党時の高揚感が脳裏に焼き付いている。社会党時代は協会・反協会の論争と対立が常態化していた。ある意味では、あの論争が私たちの思想形成に貢献したことは事実である。協会派と言われた人の多くは離脱したが、困難な中で社会主義政党として結党に尽力された先輩・同志は誇らしい、感謝しかない。

25年を経て党が変質していく様を見るのが辛い。労働者に信頼され、誇れる社会主義政党であって欲しい。
(2021年6月29日 山下 俊幸)

武委員長の実刑判決を阻止！

―滋賀のタイヨウ生コン事件(1千万円恐喝容疑) 勝訴をバネに―

反転攻勢へ

7月13日、今年一番の気温で汗ばむ大阪地裁前、3年前からの連帯ユニオン関西地区生コン支部・武建一委員長関連の判決が午前10時に下された。午前8時過ぎには反弾圧闘争に立ち上がる関西・北海道から中国地方までの全国の仲間400人が結集。対する「生コン大阪広域協組」とそこに雇われた数人のレイシストたちは300人。24席の傍聴券争奪戦で私たちがまず圧勝する。

10時15分過ぎ、関生支部・坂田副委員長が「不当判決」の紙を持って地裁前の集会場に到着。「判決は『懲役3年、執行猶予5年』です。武委員長の懲役8年の実刑は阻止しました。これは皆さんの闘いのおかげです。感謝します。しかし、ストライキをやって執行猶予付きとはいえ懲役判決は決して許せません。関生は闘い続けます。さらなるご支援よろしくお願いします」との報告。

そして一時間ほど各地の闘いの報告・決意、韓国労働者の音楽も入り、闘う気迫に満ち溢れたところに、武委員長が現れた。「きょうは実刑でそのまま行かねばならないかとも思い、全く手ぶらで来ました。」と、産別労働運動の意義や現在の政治情勢と総選挙闘争の位置づけまで含め、全面展開の挨拶は健在だった。

集会後、会場をかえて支援組織の全国会議も開催され、担当弁護士から判決要旨の説明もなされた。

滋賀のタイヨウ生コン事件で1000万円恐喝で起訴されたが、その事実が認定できないと、正当にも武委員長は勝訴した。今次弾圧事件で、土俵を労働法でなくわざと刑事部組織犯罪対策課(広域暴力団担当)に替えて、行った弾圧事案で、初めての勝訴を勝ち取った意義は絶大である。武委員長は集団で恐喝して、資金をためて労組拡大強化して今日があるという、警察・検察のストーリーの最大のポイントが崩れたわけで、容易にこれを覆せない。そして、これがゆえに執行猶予となった。

フジタのチェリオでのコンプライアンス活動は、工事現場での法令順守活動を威力業務妨害などのでっち上げだ。

阪神淡路大震災でのシャブコン（水増し生コン）や安上がりの海砂使用での、新幹線や高速道路路橋脚崩壊などの問題が裁判官に理解されていなかった。17年12月の大阪港SSでバラ車の運行妨害ということは、裁判官の産別労働運動の無理解による敗訴であった。

いずれにせよ、武委員長を8年の実刑を食らわせ、関生支部の最後の息の根を止めようと言う検察の企みは推しとどめた。滋賀のタイヨウ生コン事件勝訴をばねに、反攻勢の開始だ。労働組合がストライキをして有罪判決など、決して許せるものではない。

関生支部弾圧を指揮したセクハラ警視が彦根警察署長に「栄転」!

滋賀県警の今春の人事異動で、彦根警察署長に就任した羽田賢一郎警視の2014年3月からの警察庁出向中の同僚女性へのセクハラが問題となっている。「女を出せ。女らしくしとつたらいいねん」などと何度も羽田警視から言われた女性は抑うつ状態となり、警察庁が17年3月に公務災害と認定。

被害女性は18年4月に羽田警視に対し損害賠償訴訟を東京地裁に提訴し係争中。

この羽田警視は16年春県警に帰任後、県警の組織犯罪対策課長（広域暴力団対策）などを務め、18年夏からの連帯ユニオン関生支部への不当弾圧の担当として、実行指揮の中心を担ったと目されている。未明関生組合員宅に強制捜査をかけ、男性刑事に労組員の妻の下着を調べさせ、心の病になってしまった家族もいる。

労働組合のあたりまえの活動を刑事事件に仕立て上げ、捜査においても労組員の妻に、「完全黙秘しとつたらいつまでも出てこれへんぞ。あんたからも関生と手を切れと言え」と不当労働行為丸出しの長期勾留など、無法ぶりが指摘されてきた。

21年7月13日の大阪地裁では、滋賀のタイヨウ生コン事件（1000万円恐喝）で武建一委員長が無罪判決を得たが、この羽田警視が指揮していた事件である。

21年4月の県警定例記者会見で近畿初の滝沢依子・女性県警本部長（19年12月25日より）はセクハラ署長就任を「適正な人事だった」と記者の質問に答弁（朝日・京都新聞）。セクハラ発言で総理大臣経験者がオリ・パラ組織委員長も引責辞任せねばならない昨今、女性が女性の権利・人権を理解しないあきれる答弁だ。

大津地裁は公正な審理を

これは、人権蹂躪の今次関生弾圧の本質を体現した事象であり、決して許せない、大津地裁は公正な審理をせよと、かんなま勝手連・しがも結集する反弾圧京滋実行委員会、仲間の奪還から2年ぶりに大津市内の繁華街署名宣伝や県警・大津警察署前抗議行動を開始した。

次々に大津地裁への公正審理を求める署名に協力いただく労働者・市民の皆さんに、2年前の初秋、関生・西山執行委員奪還まで一年続けた、50回連続の毎週土曜日大津警察署前抗議行動を思い起こし、「滋賀県民の良識は健在だった」と、ほっと胸をなでおろした。8月3日には彦根での宣伝も実施する。

（かんなま勝手連・しが 稲村守）

ヒロシマ・ナガサキ 原爆「写真・絵」展

―チエルノブイリ原発事故から35年！ フクシマ原発事故から10年！―

新得町（北海道）は第2次世界大戦の惨禍、広島・長崎の原爆、チエルノブイリ原発事故を教訓に核兵器廃絶新得町平和宣言を制定して35年になります。

2015年8月の第1回原爆展から7回目。「人類を破滅に導く核兵器の廃絶と非核三原則が完全に守られること」（核兵器廃絶新得町平和宣言）を願って、戦争と原爆の悲惨さ、平和の尊さを伝える原爆「写真・絵」展を開催します。

（事務局長 佐野 周二）

▽名称 ヒロシマ・ナガサキ原爆「写真・絵」展

▽期間 8月4日（水）～12日（木）午前9時～午後8時（最終日は午後3時）

▽会場 新得町公民館 1階ロビーホール ＊鑑賞は無料。

◎主催 原爆展を観る新得会（共同代表：平良則・広山輝男）

◎後援 新得町／新得町教育委員会

◎協賛 反核平和の火リレー新得地区実行委員会

*写真・絵の提供は広島平和記念資料館。

▽チエルノブイリ原発事故から35年！ フクシマ原発事故から10年！

1986年4月26日のチエルノブイリ原発事故から35年、

2011年3月11日のフクシマ原発事故から10年、

2012年5月5日 北電泊原発 1～3号が運転停止して9年です。

▽原発の再稼働反対！ 核（原発）のゴミ持込は許さない！

さよなら原発！スタンディング（街頭宣伝）アクション！

道行くドライバーの皆さんに、プラカード、旗などを掲げ、さよなら原発を訴えます。

泊原発の廃炉をめざす十勝連絡会と共催です。会員の皆さんの参加をお願いします。

▽日時 8月28日（土）13時～14時 ＊集合13時

▽場所 新得町公民館横・国道沿い（非核宣言の看板前）＊マスク着用のこと。

▽共催 泊原発の廃炉をめざす会 十勝連絡会

さよなら原発！ 新得会（第11回街頭アピール行動）

◇信州松本通信◇

松本市音楽文化ホールの運営に携わって

経済学はロビンソン物語を愛好する (一)

(一) はじめに ～ 不思議に思われていたホールの運営 ～

松本市音楽文化ホールで、ホールの運営及び演奏会の企画に14年携わりました。

声を掛けてくれる方がいて、現役中の約束もあり、退職して四年目までは地元元の信州大学、松本大学の他に、長崎大学での連続講座、東京での日本舞台芸術興会主催の

全国劇場事業者勉強会交流会等、県外でも四ヶ所ほどで、「ホールの運営」についての講座に向く機会がありました。

信州の片田舎に立地するクラシック音楽専門ホールで、何故に集客数が全国の公立文化施設では群を抜いてのトップクラスなのか。ほぼ毎月開催される演奏会の約半数で、何故にチケットが完売になるのか。そしてまた、メインホール、小ホールに加えて三つの練習室の利用率が、常時95パーセントを下回らないのか。こうしたことが不思議であり、ホール等の利用率の向上、演奏会における集客方法について、教えてほしいというのです。

答えは簡単です。一言で言えば、「能う限り、『目的意識的計画的』に、すなわち『各自の家計のやり繰り』のように、別の言葉でいえば『社会主義的』に、あるいは『ロビンソン・クルーソー』のように、仕事をしたつもり」だからです。別の言い方をすれば、松本市職員労働組合の役員等が首になってからも勉強し続けて来た『資本論』の「経済学」を中心に、「マルクス学」で学んだことを、自分なりに職場で応用して実践したからです。

(二) 市民社会Ⅱブルジョア社会という経済的社会構成体

市民革命後の社会、日本では明治維新後の社会になりますが、多くの人に受け入れられている教科書的な言い方ですと「市民社会」に、私達は生きています。各々が、自由に起業し、自由に生産活動ができ、自由に商売ができる社会ですから、「自由主義社会」とも言われます。経済的には、すなわちこの社会の経済構成は、資本による商品生産が開いた社会でありますから「資本制（主義）社会」、そして主要な生産手段を掌握しているブルジョア階級が経済的に支配する社会ですから「ブルジョア社会」です。

したがって、音楽文化事業を具現化する公立のホールといえども、「マルクス以来資本主義的生産方法と呼ばれているブルジョアジー特有の生産方法」（『空想より科学へ』岩波文庫66頁）が行われている社会のもので、ホールの運営をしなくてはなりません。市民社会Ⅱブルジョア社会という経済的社会構成体における経済法則を研究し、念頭に置いて運営しなくてはなりません。

(三) 演奏会のチケットを販売するという行為

ホールや練習室の貸館については、公民館的に利用できるようにすることです。この稿では、演奏会について述べたいと思います。

まず演奏会の企画と実施に当たっては、商品としての演奏家を買取り、演奏会のチケットを商品として売る、ということをしなくてはなりません。

マルクスは『資本論』のなかで、こうした商品を取り扱う時のポイントを、次のように記しています。

「ブルジョア社会においては、すべての人は商品の買い手として、百科事典的商品知識をもっているという法的擬制が、当然のこととなっている。」（『資本論』岩波文庫第一分冊69頁）、と。

すなわち、演奏会の企画には、まずもって、演奏団体や演奏家について、そして演奏曲目のこと、曲を作った作曲者のこと、等々についての知識を「百科事典的」に知っていることが求められるというのです。

次に、「資本主義的生産方法と呼ばれているブルジョアジー特有の生産方法」(『空想より科学へ』岩波文庫版66頁)では、演奏会のチケットも「商品」として取り引きされるのですから、商品生産社会を貫く法則である「価値法則」の何たるかを常に念頭に置いて仕事をしなくてはなりません。すなわち、 x 量商品A \parallel y 量商品B、すなわち「 x 量の商品Aは y 量の商品Bに値する」という「価値方程式」が貫徹することを知っていないではありません。

その上で、芸術作品の価値、その売り買いされる値段については、一般の商品とは異なることも知っていなければなりません。このことについて、日本のマルクス向坂逸郎先生は、セザンヌの絵を例に次のように述べます。

「天才的な絵は、値段はないといった方がいい。いくら高くても売れる。それほど高い。この複製(中澤「註」向坂先生の玄関に掛けられていた複製画)だって相当に高い。どれ位するか、私は知らん。私の弟が戦後ヨーロッパに行った時買って来た、その時財布をはたいて買って来た。まごうことなき複製だよ。

レオナルド・ダ・ヴィンチにしても、セザンヌにしても、彼らの絵は彼自身にしか描けない。レムブランドにしてもそうだ。だから彼等の絵は、それぞれの値段をもっている。労働時間によってきまるのではない。一種の独占価格をもっている。それは人々の好ききらいによって定まる。そして、恐らく高くなる一方であろう。一定の不動ではない。

しかし、ペンキ商の描く絵はこれとはちがう。ペンキ商には、平均的人間なら誰でもなれる。ペンキ商には一定の熟練を得ればなれる。だけど、レオナルド・ダ・ヴィンチとか、セザンヌとかの絵は、ダ・ヴィンチとかセザンヌとかいう人にしか描けぬ。いくら練習しても、いくら熟練しても描けぬ。……。

ゲーテは、やはり勉強だけではできない。勉強しただけでは『ファウスト』は出来ない。その他の作品についてもそうである。……。」(『社会主義は克つ』63〜64頁)、と。

そんな訳ですから、世界的に著名な演奏家のチケットの販売の方法と、そうでない演奏家のチケット販売は、演奏曲目の選定に始まり、広報の方法等は全く違った手法で行わなくてはなりません。すなわち、その演奏家の知名度(世界的、日本的、あるいは長野県的な、はたまた松本的な)や実力、そうしたものに見合ったそれぞれの方法でやらなくてはならぬこと、これでありませう。

講座の講師に呼ばれた時は、いくつかの演奏会について、その具体的取り組み方を解説しました。

アンネ・ゾフィー・ムターやギドン・クレメルといった世界の頂点に君臨するヴァイオリニストの演奏会と、松本の才能教育で育ったバロック・ヴァイオリンもモダン楽器も弾きこなす桐山建志さんの演奏会では、そのチケットの販売方法は全く異なります。声のかけ方、新聞や音楽雑誌への広告の打ち方についても、それぞれ全く異なった工夫が必要です。

ムターやクレメル演奏会は、地元紙だけでなく『ぶらーぼ』といった全国誌に広告を打ちますと、北は北海道から南は福岡からお客さんが来てくれます。彼らは来日記念版のCDが必ずリリースされますから、『レコード芸術』といった雑誌には、有難いことに日本ツアーの日程が掲載もされるのです。

こうした演奏会ではチケット発売日には、ホールの窓口優先販売ですから、発売日には、北は札幌から南は福岡まで、全国からチケットを求めてホールの前は、我々の出勤時には長蛇の列になっています。先頭の何人かの方々は、前日から並んでくれています。

(四)「価値法則、価値論」の理解のために

有名なレーニンの作品である『国家と革命』、このマルクシズムの「国家論」を理解するための必読書には、次のような下りがあります。

「クーゲルマンあてのマルクスの手紙はロシア語ではすくなくとも二版でている。その一つは私の編集で、私の序言がのっている。」(岩波文庫58〜59頁)と。

この序文は、栗田賢三訳『「カール・マルクス」ほか十八編』(岩波文庫)で読めます。また国民文庫の一冊に、『クーゲルマンへの手紙』という二百頁ほどの冊子があります。マルクスが、医師であったクーゲルマンに宛てた手紙が、59通収められていて、この文庫版にも巻頭には、レーニンによる「一九〇七年ロシア語版序文」が収録されています。

ここでは、レーニンによって注目すべきいくつかの手紙についての指摘が、要を得てなされていますが、何と云っても次の下りは大切だと思っています。

「マルクス主義をいっそう完全にまた深く説明する見地からみて非常に興味があるのは、一八六八年七月十一日付の手紙である。マルクスはここで、俗流経済学者にたいする論争的批評の形で、いわゆる『労働』価値論についての自身の見解を、きわめて明瞭に叙述している。……マルクスはここで、価値法則を説明するにあたって彼がどんな道をとったか、またどんな道をとらなければならぬか、をしめしている。……マルクスを研究し、『資本論』を読み始める人々は、すべて『資本論』の初めの、もつとも困難な数章の学習にとつても、上記手紙を読み、また再三再四読み返すことがのぞましい。」(『クーゲルマンへの手紙』国民文庫12頁)、という訳です。

日本のマルクス向坂逸郎先生も、『資本論』を語る重要な場面では、この一八六八年七月十一日付の手紙を必ず引用しています。それは、『マルクス経済学の方法』(岩波書店 VI〜VII頁)、『マルクス伝』(新潮社 285〜286頁)、『資本論入門』(岩波新書 148頁)等々においてです。

マルクスの名著『資本論』をめぐる、戦前果敢に行われた「価値論争」でありますが、この『マルクス経済学の方法』での向坂先生の記述を素直に読めば、この論争の終結を感じられます。私には、ここにおいて決着がつけられていると、思えるからです。

(2021年7月3日 中澤 秀行 つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

北海道の幹線・根室本線（富良野―新得間）を存続させましょう！ JR北海道が5月19日に公表した「第2次アクションプラン」に「赤色線区」の根室線富良野―新得間が記載され、「滝川―新得間を一体として策定する」「生活面、観光面、物流面の3つの側面から事業計画期間において徹底的に検討を行う」とされたことで、富良野―新得間（81・7*）は必ず残せるとホッと思いました。ところが、根室本線対策協議会（会長・北猛俊富良野市長）は、これまで拒否していた富良野―新得間の「廃止・バス転換」に関し、総会でJR北海道の説明を受ける方向と報道されました。事態は急ピッチで動いており当会は7月6日に富良野市内で緊急行動を取組みました。

当会と北の鉄路存続を求める会ら約20人が、「富良野―新得間を存続させよう！」「北の鉄路を守ろう！」と横断幕を掲げ、出席者へチラシを手渡し、存続を訴えました。平代表は「根室本線は生活に欠かせない重要な交通機関。全線区を残して欲しい」「不通の新得―東鹿越間の復旧を優先すべきだ」「鉄路を道内の広域観光に生かすにしても、真ん中が寸断されては意味が無い。まずは国の責任で不通区間を復旧させるべきだ」と。事務局の佐野は「廃線が前提となった話し合いが進んでしまうのでないか。協議の身をちゃんと住民に知らせて欲しい」「JRの説明を聞くことは廃止・バス転換につながりかねない。協議会の方針転換はあまりに唐突」と報道各社にコメントしました。

富良野―新得 バス転換含め協議入り 〓 マスコミ報道より 〓

北市長によると、「総会ではJR北海道から、①路線存続の場合、年10・9億円の維持費を地元が負担する、②バス転換による輸送代行も含めた協議を進める、との選択肢が示された」と。

根室本線の存続活動は正念場を迎え、次々と課題が見えてきます。仕事をしながらで大変ですが、やるしかありません。（根室本線の災害復旧と存続を求める会 事務局長 佐野周二）

大人の運動会 北海道にも短い夏がやってきました、6月上旬ですが連日25度以上の日が続いています、野山の草花もあつというまに緑に包みこまれる気候を迎えています。

事業関係では、新型コロナの影響で昨年から相次ぐイベントの中止で一年以上イベント等での出店販売を断念せざるをえない状況の中ですが、生協・コープのカatalog注文やネットでの売上が多くなっています。工芸部では現在、ふるさと納税の返礼品の新しい商品開発を手掛け、試作品3点がこのほど出来あがり、全国発送の準備が進められています。

新型コロナの影響で厳しい環境は続きますが、何とか乗り越えて行こうと考えています。7月には第15期の定時総会を迎えますが、次の1年に向けてしっかりと意思統一を図りたいと考えています。

新型コロナ禍で子どもたちの運動会、修学旅行が中止を余儀なくされている中で、政府は大人の運動会「オリンピック」を開催しようとしています。国民の健康や命よりも、オリンピックが優先の政治に驚くばかりです。この様な状況に負けず、引き続き、地域に根差した運営を目指して皆様と活動を続けて行きたいと考えます。（ecoおといねっぶ通信 2021夏号）

投稿文で 7月6日（火）号が届き 読み進めると5面記事の中に「いちおし」投稿者は長野県・菅原須摩子様。お茶の心は「人に心せよ」が基本と。人は人と生きていく、奥の深い言葉に感心しました。私はコーヒー党ですが、どの道にも通じる事ですね。長年お茶を嗜んで来られた方の含蓄のある言葉。日々の雑事に追われ、自己中心的に陥りがちですが、人は一人では生きていけない、人様の手をかりて生きてゆけるのだと。活かされるのだと、改めて考えさせられました。

（2021年7月5日 東京・武蔵野市 兼子千栄子）